

『人間失格』論

大 内 君 子

卒業研究で太宰治研究を行なうことは、以前から決めていたことではあるが、『人間失格』に的をしばつたのは、時期的におしつまってからである。実際に作品分析を始めてみると、わからないところばかりで、最後のまとめの段階では、分析結果を総合することがあまりできなかった。分析は、罪・他者・故郷・女性・芸術という五つのテーマを設けて、葉蔵の生き方を探ってみた。ここに掲げるのは、『人間失格』の方法と、分析結果を、大ざっぱにまとめたものである。

一、

『人間失格』は、昭和二十三年三月～五月にかけて書かれている。太宰治が入水自殺したのが、同年の六月十三日。雑誌「展望」に発表されたのが、六月号から三回にわけてであるから、死の直前に完成し、死を中途にはさんで発表された作品である。形式の上では、「はしがき」と「あとがき」をのぞき、すべて主人公大庭葉蔵の

手記（それは、バアのマダムから「私」に与えられた）の体裁をとり虚構性を持つ。その手記の背景となっている時代は、昭和五・六年であり、太宰の晩年の時代とは異なっているが、東北の大地主の子、左翼運動・数回の自殺未遂事件などの事実と照合してみると、虚構性はあるものの、かなりの目伝的要素を認めないわけにはいかない。しかし、自然主義的手法による「私小説」とはかなり趣を異にしていると考えられる。「はしがき」、第一・第二・第三の手記、「あとがき」において、素材としては、太宰自身の生活体験を拠りどころとしていながら、事実そのもののリアリティーを持たせているわけではない。かといって、事実を再構成して、新たな、完全な虚構の世界をつくりあげているわけでもないだろう。太宰は、『人間失格』において、事実そのものを描いたのではなく、事実に対する心情、太宰の解釈を語ったといえる。そのような意味で、処女作『思ひ出』(8)との相違は著しい。『思ひ出』にみられるような、自己の幼い時の経験に即した素直さのようなものは、「人間失

格」においてはみられないといつてよいだろう。彼は、一步離れた場所から、自己の内面を冷たく鋭くしかも暗澹とした目で観ているようである。手のこんだ作品構成で、太宰は、自己の面前に、その内面像である葉蔵をつかみ出したといえるであろう。そして、葉蔵が、中学時代の友人竹一にしか見せなかつた「自分でもぎよつとしたほど陰惨な絵ができあがりました。しかし、それこそ、胸底にひた隠しに隠してゐる自分の正体なのだ」（第二の手記）というその陰惨な目画像を、太宰自身の手で、目虐的に作品化したのが、『人間失格』ということになるであろう。

二、

ところで、胸底にひた隠しに隠していた正体―主人公大庭葉蔵は、どのような人間として描かれているだろうか。葉蔵は、世俗の人間世界からはじき出された、題名の表わすような人間失格者として設定されている。例えば、それは、具体的には、幼年時代、停車場のブリッヂや地下鉄、枕カウア、敷布等生活実用的なものを装飾品として認識し、食事の時間さえも苦痛に感じる、という人間世界に適応できない性格を持つところと端を発している。葉蔵は、生まれながらの鋭い感受性によって、幼時より見せつけられた人間的エゴイズムに対し不

信を抱き、人間を恐怖する。やがて彼は、東北のいなかから、東京に出て、その都会において、様々な悲惨な目に合い、ついに、「人間・失格」という意識を持つに至るのである。彼が、その意識を持つに至るのには、次のような原因が考えられるだろう。東北のいなかから出て都会で暮らすことによる故郷喪失、幼児からの母の欠落、また数々の女性たちとの交渉の末の母性への絶望、真の自己を表現しようとして画家を夢みるが、結局くだらない漫画家にしかたれない芸術家としての失格、また世間にはばられ、自分の内に絶対者を見出せない絶望である。そのようなものが、彼の精神をがんじがらめにし、人間失格者の道を歩ませるのである。内に絶対者を求められず、又、帰りゆく母の、故郷のふところを持たない、つまり、存在の根を持たない根無草として、葉蔵は、廃人としてさまよわなければならぬのである。

太宰は、このような主人公葉蔵を描くことによって、何を問いかけるのだろうか。それは、人間がもはや人間でなくなるといふことよりも、むしろ、人間が人間になる条件のはばまれていくところでは、人間は人間になろうとすればするほど、逆に人間でなくなってしまうという悲劇の中に追いこまれてゆくことではなかつたらうか。太宰が真の自己になろうとすればするほど、奇

妙な目虐に追いこまれていった原因は、太宰自身の中にあつたことは確かである。葉蔵の、「恥の多い生涯を送つてきました」(第一の手記)という言葉の裏にあるのは、原罪的な恥の意識であるが、太宰自身も又、その意識を持っていたといえよう。その意識は、太宰個人の問題でなく、我々の社会が人間に強いている根強い因習のようなものかもしれない。

太宰はついに、社会と個人という相関関係の中で自己を考えられることができなかった。葉蔵はたえず人間を恐怖しているが、その人間恐怖というモチーフは、太宰において、世間が恐ろしいという意識ではなかったか。むしろ太宰は、世間の眼というものの虚妄性に気付いてはいたろう。

(そんな事をする、世間からひどいめに逢ふぞ。)

(世間ぢやない。あなたでせう?)

(いまに世間から葬られる。)

(世間ぢやない。葬るのは、あなたでせう。)

汝は、汝個人のおそろしき、怪奇・悪辣・古狸性・妖婆性を知れ!

(中略・筆者)

けれども、その時以来、自分は、(世間とは個人ぢやないか)という、思想めいたものを持つやうにな

つたのです。

(第三の手記)

太宰は、世間とは個人ではないかと判断したが、それはまだ正しい判断ではなかったようだ。なぜなら、世間という意識を裏がえしにすると、「家」というものが常に潜在しているからである。太宰も又、「家」の秩序に圧された人間であつたろう。「私は政治運動には興味がない。自分の性格がそれに向かないばかりか、それに依つて自分が救はれると思つてゐない。ただそれは、自分には、うつたうしい許りだ。私の視線は、いつも人間の、『家』のほうに向いてゐる。」(『家庭の幸福』傍点筆者)と書いているように、世間と家という相関関係の中でしか人間を考えられない時、そこからは、社会と個人という認識は生まれてくるはずなのである。その「家」世間こそ、葉蔵が、太宰が、真実の人間になることをはばんだものではなかつたろうか。

三、

『人間失格』において、世間にしぼられ、そして、世間に敗れた人間が見出した安らぎの場所は、結局、淫売婦や日蔭者、非合法運動の世界であつた。太宰は、そう書くことによつて、生の秩序や論理、そのかたい殻の下にひそんでいる非合理的な生への自由な願望をとりあげ

ているという見方は可能であろう。太宰にとって、生とは、現実生活、実社会を力強く生きぬいていく人間、目的意識につらぬかれ、論理で現実というものはかる人間たちの生ばかりではなかった。太宰の鋭敏な感受性は、それと反対側にある、非合法、非論理的な生をさぐりあっていたのではないだろうか。

非合法。自分には、それが幽かに楽しかったのです。むしろ、居心地がよかったです。世の中の合法といふもののが、かへっておそろしく、（それには底知れず強いものが予感せられます）そのからくりが不可解で、とてもその窓のない、底冷えのする部屋には座ってをられず、外は非合法の海であつても、それに飛び込んで泳いで、やがて死に到るはうが、自分には、いっそ気楽のやうでした。

（第二の手記）

自己のあるべき場所は、そのような所に見出した太宰の奥底で、彼を支配しているものは、まぎれもない感覚であつた。彼の、生活者としての行為の否定は、感覚の支配する世界に彼を引き入れたのである。そして、それに支配されて生きる時、太宰の人生の様相は、全く姿を変えてしまう。太宰の目には、実社会の実利的なもの、実人生、現実生活は、完全に皮相なものとして映つたので

はないだろうか。そういった感覚的世界への依存は、自己の存在やまわりの世界を、主体的につくりあげるという方向を生み出さない。そこに、太宰が、最後には、自己否定によって終わらざるを得なくなった理由もあるだろう。また、太宰が、社会と個人という認識を持てなかつたのも、その理由にもよるかもしれない。

この『人間失格』が、我々を打つのは、太宰が生涯のおわりに描いた、罪や神・愛・あるいは、前述したような、非合理的な生への願望のリアリティーによるところが大きいのではないだろうか。最も人目に触れさせたくない部分を、彼独特の目虐の視点によって、白日の下にさらけ出したこと、また同時に、世間をのがれようとした、不合理な、非合法の世界への暗い願望が、読む者にリアリティーを感じさせるであろう。

しかし、一歩離れて『人間失格』をみてみるならば、ふと立ち止まらざるを得ない。人は、人生を生きるうえで、様々な経験をし、その経験から多くのものを学び、成長してゆくものであろう。社会に生きる人間として。しかし、葉蔵は、自己の経験から決して学んではない。徹底した人間不信感から、人間の醜悪さに対して、真向から立ちあがり抗議し、闘つていこうとする精神、態度は、葉蔵には見受けられない。それはもちろん、彼特有

の感受性によるのであるが。あくまで自己の感受性のま
まに生きていく、それは、言葉を変えるなら、自己自身
を変革していかない、ということになるのではないだろ
うか。そのような意味からすれば、葉蔵はおそらく、万
年青年とも言うべき、純粋さを持っていたといえよう。
しかし、人は、やはり常に、自己自身をのり超えていか
なくてはならないのではないだろうか。太宰の人生への
真摯さは、確かに、人生の真実を見せてくれるが、やは
り、太宰は生きねばならなかった。葉蔵は、自分自身を
つくりあげていかねばならなかった、というと極端だが、
より我々に近づけて考えてみると、そういった批判が生
まれてくるのも無理のないことであろう。と言っても、
我々は、葉蔵の、太宰の生き方を、真向から批判、否定
することなどできるはずはない。彼らの生き方も又、人
間の真実に他ならないのだから。

主なる参考文献

奥野健男『太宰治論』

饒庭孝男『太宰治論』

佐古純一郎『太宰治論』

その他雑誌の載文など、太宰治。『人間失格』に関
する資料